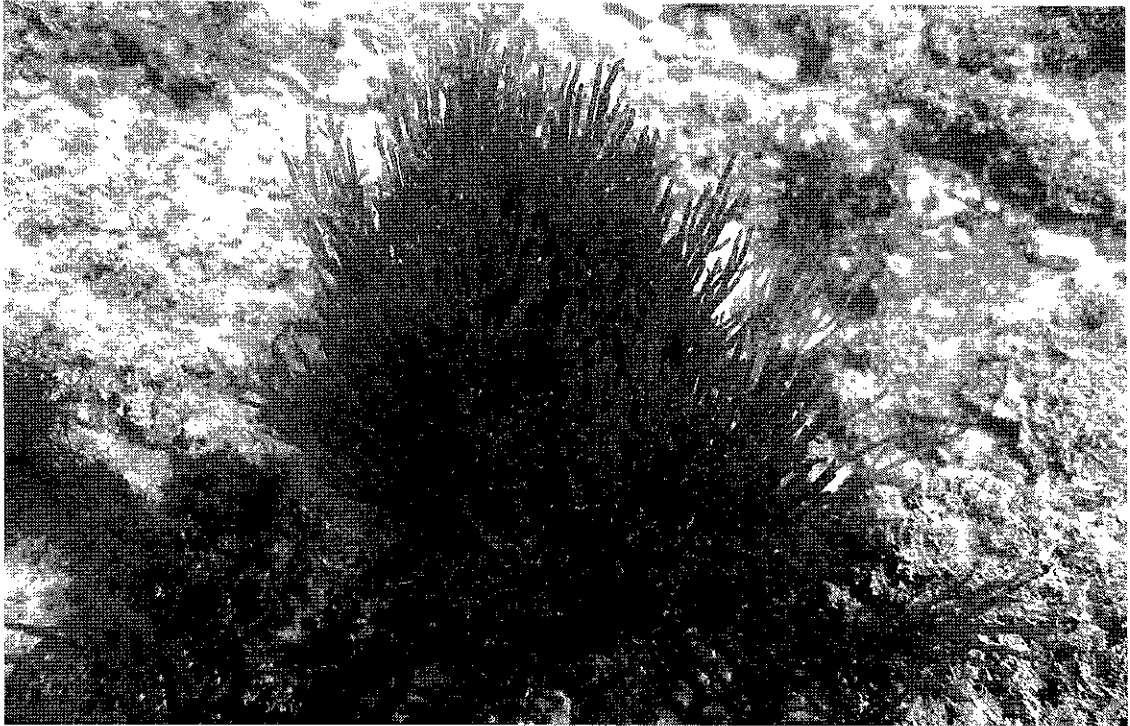


串本海中公園 マリンパビリオン

2003. 3

Vol. 32, No. 2



フシツナギ

Lomentaria catenata

茎は枝を対生又は輪生に出し、そこからさらに小枝を同様に分岐させる。枝は一定の間隔でゆるくくびれており、その様子が節がつながったように見えることから「ふしつなぎ」の名があるが、実際には体は分節していない。茎の太さは1～1.5 mm程度で円柱状、内部は中空である。石灰質ではないが、ゴワゴワした手触りがする。体は集まって大きな塊状となるが、根は細い繊維状で弱いので、引っ張ると基盤から容易に剥がれる。色は薄い紅色。春期～初夏、波のおだやかな磯周りの潮間帯下部付近から水深2 mほどの砂混じりの岩礁底に多く生育する。写真は串本町橋杭海岸の水深50 cmで撮影したもの。ダルス目。

S. U.

串本海中公園センター

いそじき(22)

串本初記録の魚6種の紹介

御前 洋

2002 年度に定置網とエビ刺し網、そして海岸の打上げ生物収拾で得られた本州初記録魚 1 種、串本初記録魚 5 種を紹介する。

アカネテンジクダイ *Apogon crassiceps*

2002 年 10 月 14 日、串本町大島に設置されている定置網で全長 59mm の本種 1 個体が捕獲された。真横から見ると長楕円形で、尾部は細く長い。体の断面は背側に細い卵型である。体色は暗赤褐色、各鰭は赤褐色である。第 1 背鰭は 6 棘、第 2 背鰭は 1 棘 9 軟条で、背鰭を倒すと、第 1 背鰭は最長の第 2 棘条が第 2 背鰭の基底前端まで、また第 2 背鰭は最長の第 6・7 軟条が尾柄のほぼ中央上部まで達する。胸鰭は 14 軟条で細長く、後端は臀鰭基底上部に達する。臀鰭は 2 棘 8 軟条である。側線は鰓蓋上部後端から第 2 背鰭基底前端までは体の輪郭とほぼ平行に走るが、それ以後第 2 背鰭基底後端にかけては輪郭との平行線よりもやや内側に曲がって正中線上に達し、その後尾鰭付け根まで直線に走る。側線有孔鱗数は 23 枚。上下顎には小さな円錐状の歯が多数備わっている。また前鰓蓋骨縁辺には鋸歯状の棘が多数備わっている。本種の分布は西表島となっており、本州での捕獲例はない。本個体は本種の北限の記録と思われる。

オグロイワシ *Sardinella melanura*

2002 年 11 月 15 日、串本町檜野に設置されている定置網で全長 60mm ~ 103mm の本種 8 個体が捕獲された。体は側扁し、正面から見ると幅の狭い逆三角形で、体高はやや高い。体色は背側は青色、腹側は銀白色、また尾鰭を除く各鰭は淡白色である。尾鰭は淡白色であるが、その上下後端は黒色で、これが種名の所以である。本種の腹部正中線には喉部から肛門手前まで棘状の稜鱗(手持ち標本では 29 枚)がある。第 2 上主上顎骨の後部は上下にやや膨らんだへ

ラ状になっている。背鰭は 17 軟条で、背鰭前方の鱗は正中線上に並んでいない。腹鰭は 8 軟条で各軟条長はほぼ同長、臀鰭は 19 軟条で、最後の 2 軟条は他の軟条よりも長い。口は小さいが開くと縦に長い楕円形となる。上下顎先端部は黒色で、下顎先端は口腔内も黒い。本種はフィリピンやニューギニア、インドネシアに分布し、日本では小笠原の父島での記録があるが、最近高知県、そして和歌山県では同年 10 月 17 日に南部町沖の棒受け網漁でキビナゴに混じって捕獲された 2 個体の記録がある。本種は沿岸域を群泳するという。この度は多数のトウゴロウイワシが捕獲されていたので、これに混じって捕獲されたものと思われる。

リュウグウベラ *Thalassoma trilobatum*

2002 年 9 月 5 日、串本町有田沖に仕掛けたイセエビ刺し網に全長 309mm の本種雄 1 個体が羅網し、当館に持ち込まれたが翌日死亡した。また 9 月 8 日にも同海域から本種雄 1 個体が採取され当館に持ち込まれたが、この個体は外傷が少なかったため、2 日後に展示水槽に移した(全長約 300mm)。本種は沖縄島、八丈島以南に分布するが、和歌山県下では 1999 年に白浜町で釣獲された体長 270mm の記録がある。県下では希少な魚種であるのでここに紹介する。

体色はくすんだ黄褐色であるが、体側には鰓蓋後方から尾柄まで 2 本の桃赤色帯が走る。またこの各桃赤色帯の上側に、これと平行して黄緑色で縁取られた上下に長い長方形をした橙色斑が、尾柄部まで規則正しく並んでいる。頬や頭部には鱗はなく滑らかで、上下顎の中央付近には犬歯状の歯が各 2 本ずつある。背鰭は 8 棘 14 軟条で、基部を含め周囲が青色に縁取られた黄褐色である。臀鰭は 3 棘 11 軟条で、背鰭と同じ黄褐色をしているが、青色の縁取りは基部および後端(11 本目)の軟条縁辺にはない。真横から見た体型は頭部上方がやや丸みを帯びて膨らんでおり、口部がやや突き出したベラ型とは異なる体型である。なお水槽に展示した個体は、2 月末現在、派手な色彩と整然と並ぶ幾

何学模様との調和の美をお客様にアピールしている。

ヤマヒメ *Snyderina yamanokami*

2002年10月7日、地先の海岸に全長222mmの本種1個体が打ち上がった。本個体は、前線通過により1昼夜続いた時化が静まったので、浜に打ち上がった「宝物」を探しに出かけた職員が持ち帰ったものである。入手時の体色は淡褐色で、後頭部および主鰓蓋骨後端と体側の3箇所(背鰭10～13棘と第7～10軟条の下部および尾柄の各側線上)に、眼径大の四角い褐色斑紋がある。また背鰭の第2・3棘の鰭膜から眼を通して下顎に至る眼球幅の褐色帯が1本、背鰭第7～9棘の基底には長方形の黒褐色斑が1つある。各鰭は、褐色の地に多数の淡桃色の虫食い状斑紋がある。本種はハオコゼ属の特徴となる眼前骨下縁の棘は2本、その1本は小さく下方へ向かうが(先端は上顎骨の上)、他方は後方に向かって長く伸び(眼の中央下)強大である。背鰭は13棘10軟条で、眼の中央上部から始まり、各棘間の鰭膜はやや切れ込むが、軟条部のそれは各鰭の先端で繋がっている。また背鰭の末端鰭条はその先端直下まで、尾柄との間に形成された鰭膜によって繋がっている。胸鰭は13軟条で長く、その後端は臀鰭基部前端に達する。臀鰭は3棘6軟条で、末端鰭には背鰭末端鰭に見られるような尾柄との間の鰭膜は形成されていない。本種の分布は相模湾から奄美大島となっているが、やや深所に棲息(相模湾では水深90mに設置された魚礁からの記録)しており、余り記録がなく貴重な標本となった。

グルクマ *Rastrelliger kanagurta*

2002年9月25日に1個体(全長273mm)、また9月29日に2個体(全長230mmと210mm)のグルクマが串本町大島の定置網で捕獲された。本種はサバに似ているがやや体高が高く、正面から見ると楕円形である。体色は背側は濃紺色で小黑点があるが、腹側は銀白色、体側には約10本の黒色縦線が走る。尾鰭はや

や黒ずんでいるが、他の各鰭は無色である。第1背鰭は10棘12軟条、また第2背鰭は5軟条で、棘がない(サバには1棘あり)。本種は1992年10月、地先の定置網に入網したものが持ち込まれているが、状態が良かったのでしばらく展示水槽に収容したところ、その後行方不明となり、標本がなかった(本紙Vol. 21, p. 63)。10年振りにやっと標本が手に入った。本種の分布は沖縄県以南となっているが、串本での捕獲記録が前回と合わせて3例、また高知県でも採集された記録がある。

ナガブダイ *Scarus rubroviolaceus*

2002年1月19日、串本町波の浦沖に仕掛けられたイセエビ刺し網に全長444mmの雌1個体が羅網した。本種の小型個体は地先の海中でクシハダミドリイシやサンゴ礫の間を泳ぎ回っているのを見かけるが、40cmを越える成魚には八重山海中公園研究所に赴任したとき以来お目にかかったことがない。成魚は恐らく串本では初記録と思われるので紹介する。本種の体型はその名の通りやや細長く、正面から見ると縦長の楕円形である。口はオウムの様な嘴状の歯板を形成し、その上顎歯板の両端近くには犬歯状の歯が1本ずつある。この歯は米粒大の大きさで、上唇からはみ出しているの直ぐに確認できる。頭部は赤褐色で頬には鱗が3列ある。体側の鱗は暗褐色で各鱗には黒い縁取りがあるが、腹部の鱗には縁取りがない。頭部から尾部にかけての体側には、各鱗の中央を横切るように幅広い6本の暗褐色縦線がある。胸鰭は15軟条で暗褐色、また腹鰭は1棘5軟条で鮮紅色、また尾鰭は赤褐色でその後端は湾入し、黒く縁取られている。背鰭は19軟条、また背鰭前方鱗数は7枚である。背鰭及び臀鰭は赤褐色で、外縁は淡赤褐色で縁取られている。なお本種は、同年12月27日にも同じ場所に仕掛けられたエビ刺し網により全長551mmの雌1個体を得ている。

なお各魚種の分布については、日本産魚類検索 全種の同定(中坊他、2000)を参考にした。

海中展望塔に集まる魚 (26)

2002年1月～12月

福田 照雄

本年(2002年)は118日の観察で、153種が記録された。前年(2001年)の150種からわずかに増加し、1998年の155種に次いで、2番目の記録となった。海水温は本年も高めの傾向が続き、年平均水温は21.8℃で平年値より0.6℃高かった。とくに2月から8月までは平年値より1～2℃程度高かった。これは不安定ながらも、黒潮の流路が前年と同様接岸傾向にあったためと思われる(本誌 Vol. 32, No. 1 参照)。

月別の出現種数をみると、1月は前年12月の84種から62種に大きく減少し、2～4月は57種で年最少となった。5月には66種、その後8月に84種と急増し、9月には年最多の96種が記録され、12月には81種になった。最多月が前年10月(100種)から1ヶ月早まったが、月別の出現状況は前年とよく似た傾向がみ

られた。

本年観察された153種のうち、前年との共通種は119種で、前年みられず今年みられたのは34種であった。このうちサビウツボ、ウルメイワシ?、タナバタウオ、イケカツオ、イソゴンベ、タコベラ、アミメブダイ、テングカワハギ、ニシキカワハギの9種が塔での初記録種であった。前年に比べ出現率の増加が目立ったのはオヤビッチャ、メガネスズメダイ、クギベラ、テングクロスジギンボ、イシガキフグなどで、とくにオヤビッチャは個体数も増えて、大きな個体が目立つようになった。また前年に出現し今年みられなかったものは32種で、このうちゴマチョウチョウウオ、ミゾレチョウチョウウオ、シコクスズメダイの3種は前年の出現率が20%以上であった。

出現率が80%以上の種は19種で、オヤビッチャ1種が増えた他は前年と同じ種構成であった。ここ数年続いている黒潮の接岸が、塔周辺の魚類相に安定した状態をもたらしている。

和 名	月 JFMAMJJASOND	日数
ウツボ	1112111-111-	20
ワカウツボ	111-1-11-1	10
サビウツボ*	---1---1-1---	3
トラウツボ	-1---11-1	6
ウルメイワシ?*	-----2-----	2
キビナゴ	4452-2323555	67
ゴンズイ	---1-11-1-	4
アカエソ	---11121-1	19
ボラ	211222112323	59
ムギイワシ	553333224355	74
トウゴロウイワシ類	2321--252455	53
オキザヨリ	-----1111-	5
アカマツカサ属sp.	---1-----	1
テリエビス	---1-----	1
イトウダウイ科sp.	---1-----	1
ヘラヤガラ	--1-1-11-1	10
アオヤガラ	-----1-	2
カサゴ	122222122222	74
イソカサゴ	-----1-	1
キリンミノ	-1-----	1
ハナミノカサゴ	1221111111-1	32
フサカサゴ科sp.	1-----	1
ヒラスズキ	--1-----	1
スジアラ	-----11-	2
リュウキュウニセスズメ?	-----1	1
タナバタウオ*	-----1-	1
オオスジイシモチ	33222221112	75

和 名	月 JFMAMJJASOND	日数
クロホシイシモチ	55555555445	113
イケカツオ*	-----1--	1
ブリ	-1--1-----	2
カスミアジ	-----1---	1
ギンガメアジ	-----1---	1
シマアジ	-1-1-----	3
マアジ	-----1---	1
アジ科sp.	--1-1-1-1-	4
バラフエダイ	-----11---	4
ヒメフエダイ	-----1---	1
フエダイ	---11-12-1	17
クロサギ	---111-12111	26
クロダイ	-1-----	1
ヘダイ	-----1-	1
イトフエフキ	-----1--	2
フタスジタマガシラ	-----1---	1
ホウライヒメジ	2222222-2112	67
オジサン	1-----122212	32
キンメモドキ	-----1-	1
ミナミハタンボ	1-----	1
トゲチョウウオ	211-12122223	66
チョウウオ	322344333333	115
ニセフウライチョウウオ	-----1---	2
ミスジチョウウオ	1-----221-	21
アケボノチョウウオ	21-----2-11	21
スミツキトノサマダイ	-1--22-2-1	22
トノサマダイ	211-----2212	33

和 名	月	JFMAMJJASOND	日数	和 名	月	JFMAMJJASOND	日数
ヤリカタギ	2	—1111—	21	アミメブダイ *	—	—11—	3
フウライチヨウチヨウウオ	1	—1—	3	ヒブダイ	—	—1-122222	48
オニハタタテダイ	—	—1—	1	アオブダイ	1	—1-1222222	54
サザナミヤッコ	—	—11-11—	9	ニシキブダイ	1	—112222	30
テンジクイサキ	3	23321233333	97	ナガブダイ	—	—1122	16
イスズミ	3	34443233344	114	ブダイ	3	22322232223	110
クロメジナ	5	55555555555	118	ブダイ科 spp.	2	—111222	34
オキナメジナ	2	21211111112	34	ワヌケトラギス	—	—1—	1
メジナ	5	55555555555	118	ヘビギンボ科 sp.	-1	-1111—	6
タカベ	—	—1—	1	ミノカエルウオ ?	11	—1111—212	29
カゴカキダイ	—	—211—	9	セダカギンボ	—	—1—	1
イシダイ	—	—1-1—	2	オウゴンニジギンボ	—	—1—	1
イシガキダイ	—	—11-1—11	8	カモハラギンボ	—	—1-11-1	9
イソゴンベ *	—	—1—	1	ニジギンボ	—	—1—	1
ミギマキ	—	—1111—	11	ミナミギンボ	—	—1111	10
タカノハダイ	1	22222222222	90	テンクロスジギンボ	1	22112222222	83
クミノミ	3	333222233233	117	クツワハゼ	2	22221111111	36
アマミスズメダイ	—	—1111—111-	14	クロユリハゼ	—	—122—1—	11
テンジクスズメダイ	2	2322221—111	60	アイゴ	1	21121122222	63
ロクセンズズメダイ	3	22212111112	51	アミアイゴ	2	1—1—1—1	8
シマスズメダイ	—	—11112121	33	ツノダシ	1	111211—1211	36
オヤビッチャ	3	333223344454	115	テングハギ	-1	-111111111	24
イシガキスズメダイ	1	—1—12222	41	ニザダイ	2	11222222323	96
イワサキスズメダイ	—	—11—	2	ヒレナガハギ	—	—1—	1
メガネスズメダイ	—	—2212	35	ニセカンランハギ	-1	-122222233	79
ソラスズメダイ	5	55555555555	118	ナガニザ	1	—11112222	43
オキナワスズメダイ	—	—21—	7	モンツキハギ	—	—11—	3
セダカスズメダイ	3	323332323333	115	サザナミハギ	—	—111-	4
コブダイ	-1	—1—	1	アカカマス ?	—	—12-2—	8
ブチスキベラ	2	222211222222	90	ツマジロモンガラ	—	—12-11	11
ムシベラ	1	—1—11—	5	ソウシハギ	—	—1—	1
カマスベラ	—	—1—1—	2	メガネウマツラハギ	—	—1-1—	2
クギベラ	1	—21-12222	50	アミメウマツラハギ	—	—1—11-	4
ホンソメワケベラ	3	323322222222	115	テングカワハギ *	—	—1—	1
ノドグロベラ	—	—1-1	2	ニシキカワハギ *	—	—1-1-	2
ササノハベラ	3	333222333323	117	カワハギ	-1	-11111111-1-	19
アカオビベラ	—	—11211	13	ウミスズメ	1	111111222222	68
カミナリベラ	3	333322233333	115	シマウミスズメ	2	212211111112	48
コガシラベラ	1	1111-1122211	38	ミナミハコフグ	—	—11—	4
ニシキベラ	3	222222323333	114	ハコフグ	3	223222222222	112
セナスジベラ	—	—1-11222	37	サザナミフグ	—	—1—	1
ヤンセンニシキベラ	—	—11	2	ハナキンチャクフグ	-1	-1—1—1	5
オトメベラ	3	333332222323	117	キタマクラ	1	22222221111	74
ヤマブキベラ	3	333323322333	118	シマキンチャクフグ	—	—1—	1
トカラベラ	—	—11-	3	イシガキフグ	1	111122222222	69
カノコベラ	—	—1—	1	ハリセンボン	-1	-111-111-12	19
ムナテンベラ	—	—1—1—	4				
イナズマベラ	—	—1-1—	2				
ホンベラ	2	221122211222	59				
カンムリベラ	—	—1111—	8				
シロタスキベラ	—	—11-1—	5				
タコベラ *	-1	—1—	1				
ハゲブダイ	—	—1—	1				

* は塔での初記録種

表中の数字は月の出現度

(1 : 少ない。2, 3 : 普通。4, 5 : 多い。)

	月	J	F	M	A	M	J	J	A	S	O	N	D	計
観察日数	8	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	118	
種数	62	57	57	57	66	72	73	84	96	88	80	81	153	

POLYCHAETOLOGICA (23)

各科の属の検索と種の説明 (8)

サシバゴカイ科 No. 7 内田 紘臣

前4回 (Vol.30: 64-65; Vol. 31: 14-15, 30-31 & 44-46) で、サシバゴカイ科で、4対の触手鬚をもち、前口葉に4本の感触手をもつ7つの属 (Vol. 30: 40-41 & 52-53 の属の検索表のうち、8 ~ 13 に示した属) を解説した。今回からは、体前部に同じように4対の触手鬚をもつが、前口葉に5本の感触手をもつ属 (属の検索表の6と14以後) について解説する。

属 *Eulalia* Savigny, 1818

サシバゴカイ科の属の中で、科の模式属である *Phyllodoce* Savigny, 1818 と並んで、最も古くに記載された属で、創設当時、属 *Phyllodoce* とは前口葉の中央感触手の有無によって区別され、別属とされたものである。属の模式種は *Nereis viridis* Linnaeus, 1767 サミドリサシバで、本種の模式産地は北ヨーロッパである。サシバゴカイ科の属の検索表 (Vol. 30: 53) の17で、*Eulalia* とあるのは間違いで、上記の綴りが正しい。この場でお詫びして訂正する。

口吻表面は全域にわたり、やや大型の乳頭状突起によって覆い尽くされる。体前部の形態は以下の式で示される。

$$1 + S \frac{1}{1} + S \frac{1}{N} \quad \text{または} \quad 1 + 0 \frac{1}{1} + S \frac{1}{N}$$

古くは前口葉に5本の感触手のある種は全てこの属とされていたため、本属には100を越える、かなり多くの種がノミネートされている。しかし、これを整理すれば、現在本属の種とされるものは約22種と思われる。

属名はフランス語系の女性の名前に由来し、従ってジェンダーは当然女性である。

わが国からはこれまで、属模式種である *E. viridis* (Linnaeus, 1767) サミドリサシバが、本州中部以南の各地から記録されているほか、*E. bilineata* (Johnston, 1840) が北海道南部と串本

から記録され、*E. viridis japonensis* Imajima et Hartman, 1964 が北海道渡島半島の潮間帯から記録されている。そのほか、*E. austrophylloformis* Uschakov, 1972 と *E. gravieri* Uschakov, 1972 とがそれぞれ東北の宮古沖と仙台沖とから記録されているが、ともに属 *Phyllotethys* の種と思われる。

上記、*E. viridis japonensis* Imajima et Hartman, 1964 は模式亜種 *E. viridis viridis* とは第2体節に剛毛を欠く点で異なるが、そのほかにも、眼が小さく、中央感触手も模式亜種より前方にあり、*E. viridis* の亜種とするより、独立の種とすべきものと判断される。

本属中には、眼を欠く種、背触鬚がウロコのようになって背中をおおう種、第4番目の触手鬚が他の触手鬚より著しく短い種、一部の感触手と一部の触手鬚が2節に分節する種、という特徴的な形態によって、他種から容易に分別される種があるが、その他の多くの種は互いによく似た形態をもつ。

残りの多くの種は背触鬚の形態によって、3グループに分けることができる。第1の型は縦長で先の尖る、槍穂型または葉状の背触鬚をもつグループであり、第2の型は先端が尖らない卵形の背触鬚をもつグループで、最後の型は横長のハート型の背触鬚をもつグループである。しかし、第3のグループは現在の所、2種を含むにすぎないので、大部分の種は第1または第2のグループに属する。

筆者の手元には、わが国からこれまでに記録のある上記3種を含め、6種ほどの標本がある。そのうちの既知種についての検索表を示せば、次のようになる。

属 *Eulalia* の種の検索

- | | | |
|----|-------------------------------------|---|
| 1. | $1 + S \frac{1}{1} + S \frac{1}{N}$ | |
| 1. | $1 + 0 \frac{1}{1} + S \frac{1}{N}$ | 2 |
| | | 3 |

(図は Vol. 30: 64 の検索表 2 の左と中央の図と同じ。但し中央感触手をもち、前

口葉は第1体節背面を覆わない)

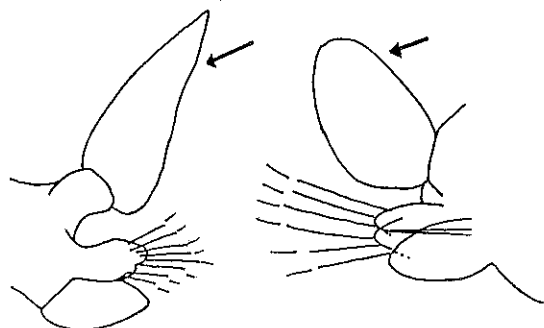
2. 背触鬚は先の尖る槍穂型。虫体背面は無紋

Eulalia viridis

2. 背触鬚は先の丸い樽形。虫体背面には

2本の暗色縦帯

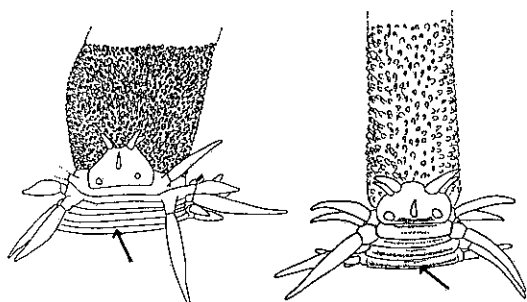
Eulalia bilineata



3. 虫体背面は無紋 *Eulalia japonensis*

3. 虫体背面はすすけた黄色で、各体節背面には、前縁に細い1本と後半を占める太い暗緑色横帯とがある

Eulalia microphylloides



Eulalia viridis (Linnaeus, 1767)

サミドリサシバ (飯塚, 1947)

学名の種小名 (viridis は"緑色の"の意) および和名が示すように、鮮やかな黄緑色をした種である。特に背触鬚の色彩は鮮やかである。虫体背面は一様に緑色で、斑紋はない。固定すると、これらの全ての緑色は番茶の茶がら色に変色する。背触鬚は槍穂形で長く、先端はよく尖る。虫体は比較的短い。第2体節に剛毛をもつ。カラーの図は西村図鑑 (Pl. 63)、沖縄図鑑 (p. 39) と千葉県史 (p. 280) に掲載されている。

模式産地は前述のように、北ヨーロッパで、

その他北半球の世界各地で記録されている。わが国では、神奈川県城ヶ島と諸磯湾から最初に記録され (Izuka, 1912)、それ以後本州中部以南から広く記録されている。

筆者の手元にあるおよそ 200 個体の標本は、和歌山県各地をはじめ、北から千葉県館山市および市川市、愛知県知多半島、兵庫県赤穂市の瀬戸内海、それに能登半島の能登島で、串本以南の記録がない。また採集場所はほとんどが岩礁海岸の潮間帯であるが、SCUBA 潜水によって、水深 5 ~ 19m から 8 個体を得ているし、エビ網の混獲によっても 1 個体を得ている。

左記検索表中の図は和歌山県白浜町番所崎潮間帯下部産の標本からのものである。

Eulalia bilineata (Johnston, 1840)

前口葉にある眼は前種より小さく、感触手も前種より細い。虫体背面には種小名 (bilineata は"2本のライン"の意) の由来である暗緑色の縦帯が2本走る。背触鬚は樽形で、先が尖らない。第2節腹触手鬚はややササベラ状になる。

模式産地はイギリス、潮間帯から採集されている。以後世界各地から記録されているが、典型的なインド-西太平洋区からは報告がない。わが国では、北海道渡島半島からの2個体の記録が最初であり (Imajima et Hartman, 1964)、その後筆者の記録を含めて、本州中南部からの数例の記録がある。

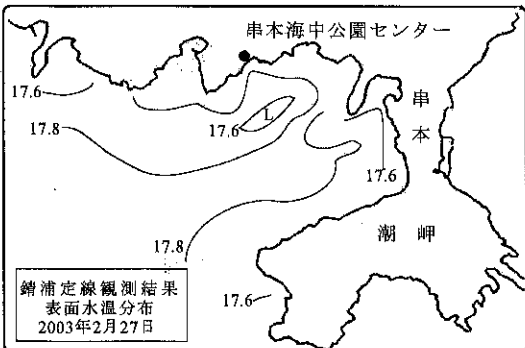
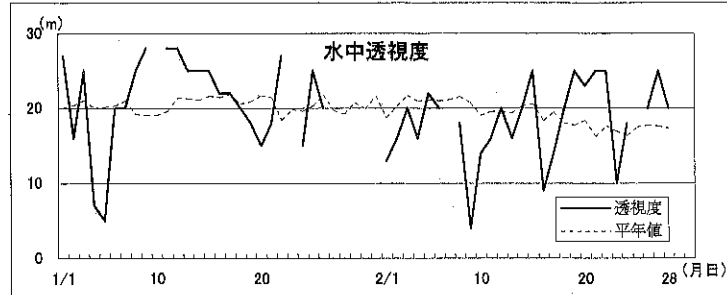
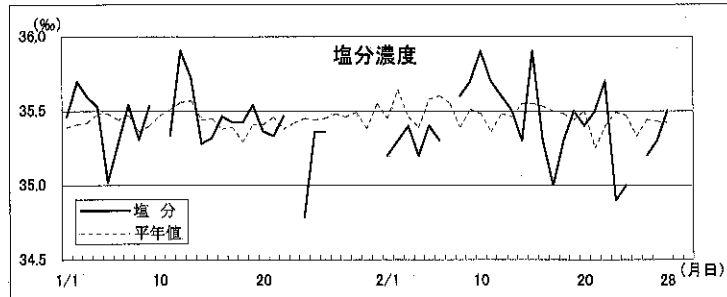
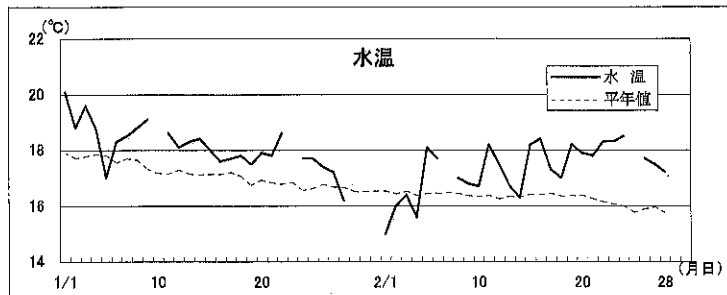
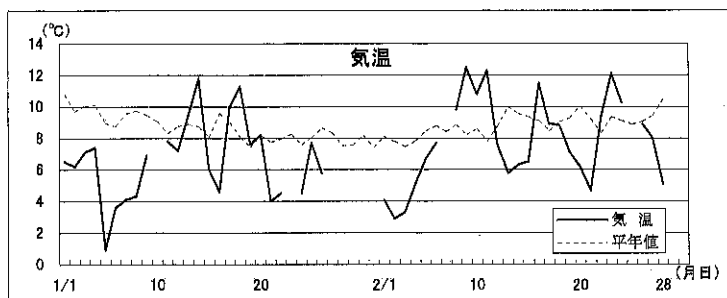
筆者の手元には串本産5個体と、千葉県館山市産1個体の標本がある。串本産5標本はそれぞれ1個体ずつ採集されていて、そのうち3個体は潮岬沖水深 100 ~ 250m のドレッジによるものである。他の2個体はそれぞれ刺網の混獲と、水深 25m での潜水採集によるものであり、これら2採集例はいずれも潮岬より東側の海域からのもので、潜水や刺網混獲物採集ではるかに採集頻度の高い、潮岬より西側 (こちら側に串本海中公園がある) からの採集記録がない。

上記検索表中の図は串本町浅海漁場網干場の刺網混獲の標本からのものである。

(属 *Eulalia* ; 次回に続く)

鯖浦の海から
宇井 晋介

平均値	1月	気温 6.4℃	水温18.0℃	塩分濃度35.3‰	水中透視度19.9m
	2月	気温 7.8℃	水温17.3℃	塩分濃度35.4‰	水中透視度18.2m



「め」は「布」と書き表し、海藻の古語である。昔は一般にワカメのことを指した。

ところがこの辺りでは「め」は「めえ」と発音し、ワカメよりもむしろヒロメやアントクメのことを指す。そのわけは、両種共にワカメに近い仲間ではあるが暖海性であるため、温暖な当地ではワカメよりも両種の方が圧倒的に多いからである。姿形はワカメの様に葉に切れ込みがなく、どちらも幅広い軍配の様な形をしている。特にヒロメは「ひとはめ（一葉布）」とも呼ばれ広く食用にされている。初春には薄く味付けしたヒロメで、すし飯を包んだこの「ひとはめ寿司」が食卓ににぎわす。ところで面白いことにこの辺りでは「ひとはめ寿司」の事を「あんろくめ寿司」と呼ぶところがある。「アンロクメ」ならぬ「アントクメ」は形こそヒロメに似ているが、体が硬く普通食用とはしない。そこでこれまで「あんろくめ寿司」はヒロメの名を誤ったものと思いこんでいた。しかしながら、よく調べてみると、この辺りでもアントクメを寿司にするところもあることがわかってきた。少々ややこしい関係にある本物と偽物の「あんろくめ寿司」。ルーツ調べは興味深い。

マリンパピリオン Vol.32, No.2 通巻368号

年 6 回発行 一部100円
(年間購読料1,000円/送料含む)
発行日 平成15年3月31日

編集兼発行人

〒649-3514 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157
(株) 串本海中公園センター
電話:0735-62-4875 FAX:0735-62-7170
URL <http://www.kushimoto.co.jp/>
印刷所 坂本印刷